

マツカサタケの意外な一面

淵澤 功

きのこに興味を持ち始めて数年がたち、その間多くの種類について見る事ができましたが、松毬（まつかさ）から出るきのこになかなか出会うことができず前から見たいと思っていました。

そんな折の一昨年（2014年）の秋、目黒の自然教育園で遊歩道脇に偶然1本のマツカサタケを見つけることができ、それ以降自分のフィールドで松毬から発生するマツカサキノコモドキ、ニセマツカサシメジと続けて出会うことができました。

発生地の環境を考えるとこれらのきのこは松林でも放置されて人の足が入らず、落ち葉が堆積して松毬に適度の湿度が保たれているような所に発生しやすいように思われます。ちょうどノルシメジやウメノハルシメジがそれぞれ人の足が入らない下草の多い放置林によく見られるのと似ているようです。

一昨年の晩秋に柏市の緑地公園に行った折、マツカサタケの出ているような環境があったので探索を試みました。あたりにマツカサキノコモドキは沢山出ていましたが、マツカサタケは小さく、また地面の落ち葉と同色で見つけづらく、なかなか見つけられませんでした。しかし腰を下ろして虫の目線で探すこと数十分、やっと2ヶ所で見つけることができました。

一つは2本立ちで、傘幅がそれぞれ9mm、15mmの小ぶりなもの（写真1）、もう一つは1本立ちの標準サイズのものでした（写真2）。



写真1



写真2

それぞれ場所に目印をつけて数日後に行ったところ日持ちがよく、殆ど形状に変化がなかったので持ち帰り、前者は小鉢に植えて屋内に、後者は屋外のプランターに植え付けました。

屋内のマツカサタケは時々水やりをして松毬が乾燥しないようにしたところ、子実体は木質状で立ち枯れ状態のまま長いこと殆ど変化がありませんでした。

一方プランターに植え付けたマツカサ

ケもかなりの期間形を保っていましたが、雨風の影響で傘の形が崩れたため、次年の再発生を期待して裏庭に放置したままになり忘れていました。

年が明けて昨年5月の初旬、たまたまプランターを覗くとマツカサタケの昨年の立ち枯れた柄から2本の新鮮な子実体が発生しており、最初は耳かき状でしたがやがて正常な成菌となりました。写真3は気づいてから6日後のほぼ傘が形成された状態で傘裏の針もまだ新鮮な白色です。



写真3

私は子実体が地中の松毬から発生するものとばかり思っていたので立ち枯れの柄から出たことは予想外でした。

マツカサタケの柄から子実体が発生することは萩本宏会員が会報29号で詳しく書かれていますが、実際に目にすると何とも不思議な感じがしました。それは硬いきのこでは時たま傘の先に子供状の子実体を形成しているのを見ることがありますが、柄と傘のあるきのこは菌糸から子実体を形成し、胞子を飛散して役目を終えて土に還るという既成概念があったからです。

マツカサタケは晩秋から梅雨にかけて発生するとゆうことなので、柄の中にとどまっていた菌糸から再発生したのでしょうか。あるいは時期が来て松毬から古い柄をつたって菌糸が伸びてきたのでしょうか。

現在分子系統に基づく分類からマツカサタケはベニタケ目とされているようですが、柄からの発生というベニタケ目らしからぬ性質はマツカサタケの持つ硬質菌のような強靱な組織に起因するものと思われます。

一方鉢入れの松毬からは屋外で再発生したのと同時期に耳かき状の幼菌を1本発生させましたが(写真4)、成長するには至りませんでした。そしてこの2本のマツカサタケは発生してから1年以上も経過している現在も乾燥状態のまま、ほぼ原形を保っていることも予想外でした。

さらに今年の年明けに屋外の松毬から3本の幼菌が発生しました(写真5)。



写真4

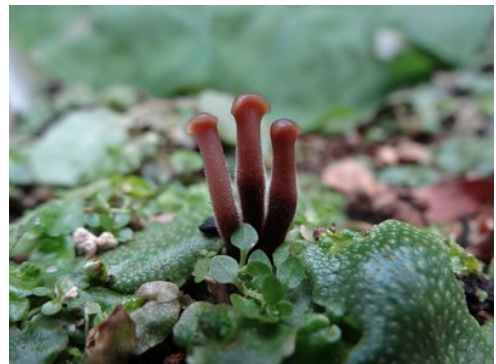


写真5

現在その後の経過を観察中ですが、マツカサタケは私にとっていろいろ思わぬ驚きと楽しみを与えてくれたきのこでした。

※44 ページへ続く